

はさまだいち
迫田 I 遺跡

調査要綱

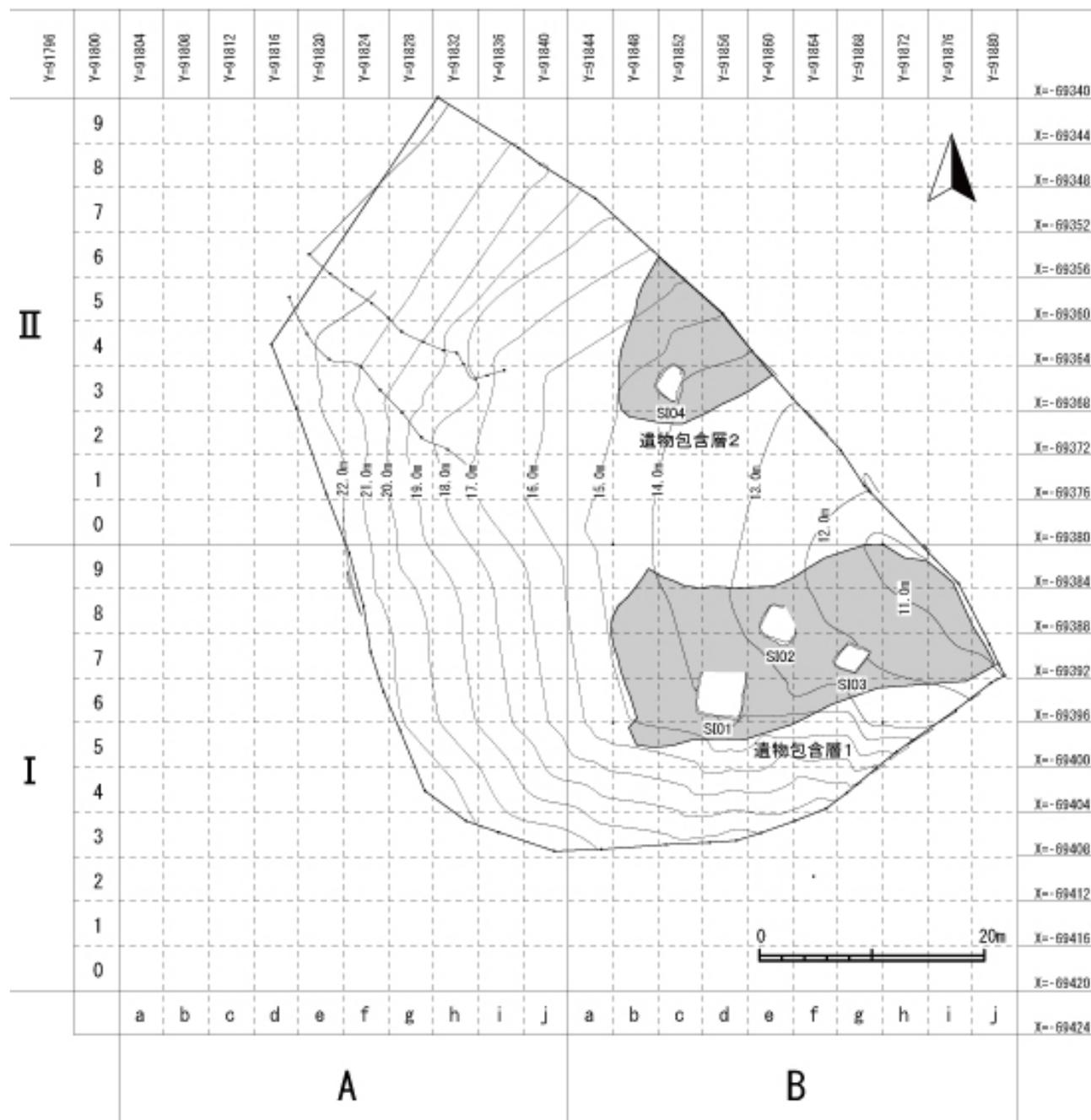
遺 跡 名：迫田 I 遺跡
所 在 地：上閉伊郡大槌町大槌第 15 地割
事 業 名：三陸沿岸道路
調 査 機 関：(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
委 託 者：国土交通省東北地方整備局南三陸国道事務所
発掘調査期間：平成 28 年 8 月 1 日～9 月 21 日
調査対象面積：2,000 m²
調 査 担 当 者：羽柴直人 對馬利彦 酒井野々子



迫田 I 遺跡調査風景

調査の成果概要

三陸沿岸道路の建設により、遺跡の一部に影響が及ぶため、記録保存^{きろくほぞん}のため発掘調査面がおこなわれています。調査では縄文時代早期と前期の遺物が含まれる遺物包含層^{いぶつほうがんそう}と平安時代前半（9世紀～10世紀初頭）^{たてあなじゅうきよあと} 竪穴住居跡4棟がみつかりました。



迫田 I 遺跡遺構配置図

縄文時代遺物包含層

南北2か所に分かれて、縄文時代の遺物を含む地層（遺物包含層）がみつかっています。包含されている遺物は、縄文時代前期前葉の土器、石器（約6,000～7,000年前）が中心ですが、縄文時代早期の土器（約7,000～8,000年前）も少量含まれています。前期前葉の土器と早期の土器は混在した状態でみつかり、土層の生成とともに、近隣の地点から土器、石器が流入したものと推測されます。

縄文時代早期の土器は、赤貝などの縁がギザギザの貝殻を用いる「貝殻腹縁文」の文様が施されたものです。完全な形のものはありませんが、底部が尖り、体部中央から口縁部が広がる形の土器と推測されます。

縄文時代前期前葉の土器は、全面に縄文が施され、底部が尖る形の土器が主体を占めると推測されます。これらは、土器を造形する粘土に植物の繊維を混入した「繊維土器」と呼ばれるものです。また、出土した石器のほとんども、これらの土器に伴う前期前葉の年代のものと推測されます。



早期貝殻文土器



貝殻腹縁文の施文（土器は住田町山脈地遺跡出土遺物）



前期前葉の土器



包含層出土の石器

平安時代前半の住居跡

調査範囲の東半部で平安時代前半の^{たてあなじゆうきよあと}竪穴住居跡が4棟みついています。いずれも規模の小さい小型の住居跡です。SI 1、SI 2（SI は住居跡の略記号）は^{かべぎわ}壁際にカマドが設置されていますが、SI 3、SI 4のカマドははっきりしません。出土した遺物（^{はじき}土師器、^{すえき}須恵器）から、いずれの住居跡も西暦9世紀～10世紀初め頃の年代が想定されます。SI 1、SI 2の^{ゆかめん}床面近くからは、西暦915年に噴火したとされる「^{とわだ かざんばい}十和田 a 火山灰」と推測される火山灰（^{かがくぶんせき}科学分析未了のため未確定）がみつかり、住居跡の年代を^{ついきゅう}追及する良好な^{しりょう}試料が得られています。



竪穴住居跡（S I 1）



竪穴住居跡（S I 2）



^{はじきつき}土師器坏 (S I 1 出土)



^{はじきちょうどうがめ}土師器長胴甕 (S I 1 出土)

まとめ

迫田 I 遺跡は、縄文時代^{そうき}早期、^{ぜんきぜんよう}前期前葉と平安時代前半の^{ふくごういせき}複合遺跡です。遺跡は三陸沿岸道路のインターチェンジとなる地点ですが、^{こらい}古来から海岸部と内陸部を結ぶ交通の^{ようしゅう}要衝であり、繰り返し人々の生活が^{いとな}営まれたものと解釈されます。

調査にあたっては、南三陸国道事務所、岩手県教育委員会、大槌町教育委員会等の^{かんけいきかん}関係機関、そして、大槌町の皆様の多大なるご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。